

## 「台湾のジャワ煉瓦（１）」（２０２０年０９月２１日）

ポルトガル人は広東にたどり着いたあと、日本との交易の端緒を求めて中国人船乗りを雇い、日本への航路に踏み込んだ。その航路は広州湾から広東沿岸→福建?州沿岸→琉球→日本というルートで、このルートは台湾の西岸を三日間走る。

1542年にはじめて通ったその航路で、はじめて目にした台湾の島影の美しさに感動したポルトガル人が「美しい島だ」と口走ったことから、ポルトガル語で「美しい」を意味するフォルモサ *formosa* が台湾の名称として西洋世界に伝わったという話になっている。

だが、この常識がまた覆されそうな話が出されている。台湾アカデミアシニカ研究員の翁佳音氏と編集者黄駿完氏が著わした *Decoding the History of Taiwan from 1550-1720* で著者は、ポルトガル人が美しいと言った島は台湾でなく琉球ではないだろうか、という論証を展開した。

ポルトガル人がフォルモサと呼んだ島は北西から南東に全長およそ100キロで伸びている島であり、台湾は北東から南西におよそ400キロに渡って伸びているのだから、内容が合致しない、と著者は主張している。その条件に合う島は多分沖縄であり、台湾に結びつけたのは後世に起こった別の話ではないだろうかと言うのである。

あの時期に作られたポルトガルの書類のほとんどが台湾を小琉球 *Lequeo Pequeno* と記している。1584年より前に台湾がフォルモサと呼ばれた例は見つからず、1584年にスペイン船隊がはじめて台湾海域を航行したときに台湾を「美しい島」という言葉で呼び、それ以来作られた海図に描かれた台湾に *Hermosa* という名称が添えられたそうだ。

その後世界の航海者はヘルモサを通称にし、オランダが台湾南部に基地を設けた1624年にその島を *Formosa* と称することをオランダ人が決めた。

つまりポルトガル人は台湾をフォルモサと呼んでおらず、スペイン人が台湾をヘルモサと呼び、オランダ人がわざわざポルトガル語のフォルモサを台湾の公称にしてしまった、というストーリーがその内容である。

西洋人としてはじめて台湾を「発見」したポルトガル人は、その島の土地を領有する意志を持たず、中国のアモイで十分と考えたようだ。台湾の住民とは小規模な交易を行っただけであり、台湾に深く関わろうとしなかった。反対に、台湾に領土を築いたのはスペイン人だ。

スペイン人はセブを占領し、更にルソンを攻略して1571年にマニラを首都に定めた。そのときスペイン人は、台湾はフィリピンの一部であると宣言した。

スペイン人はメキシコの銀をアジアに持ってきて中国産のスパイス・絹・陶器などを買い付けた。スペイン船がメキシコへ戻る際はマニラから台湾の花 Hua 東海岸を経由したあと北上し、日本市場に手を掛けつつメキシコへの航路をたどった。

16世紀半ばに倭寇が浙江、福建、広東の沿海を荒らしたが明軍に追い出されて台湾に移っている。その後日本で豊臣政権が確立されると、日本が台湾を占領してマニラ＝中国貿易の障害となる不安が一時期マニラに広がった。だがそれは現実のものにならなかった。

17世紀になって日本に徳川政権が誕生したが、明は日本との交易を喜ばず、結果的に日本の朱印船は台湾に赴いて福建商人と密貿易を行った。[ 続く ]

## 「台湾のジャワ煉瓦（2）」（2020年09月22日）

ポルトガルが1553年以来マカオに取りついて中国貿易を行い、明はマカオで徴税を行っていた。台湾に明の徴税機構の手が届いていないことを見て取ったスペイン人は、中国本土に拠点を構えるよりは台湾に領土を置く方がはるかに有利であるという考えを持っていたようだ。

ヨーロッパでオランダ人の独立回復闘争にかみつかれていたスペイン人は、1599年にオランダ船がフィリピン海域に出現したことに驚かされた。オランダは1622年に澎湖島を奪取して要塞を構築したが明の強力な反撃に敗れて和平し、台湾に拠点を移した。ここはやめて台湾にしると明側に言われた、という話になっている。

台湾はオランダにとって日本航路の中継港を置くための好所に位置している一方、スペインにとってオランダの台湾進出は日本航路を切断することになるおそれが高く、そんなことになれば大損害を蒙る。それを防ぐには1624年に台湾南部に基地を置いたオランダに対して、台湾北部にスペインの拠点を設けるのが最上の戦略と判断された。

1626年、スペイン船隊は基隆社寮 Keelung Sheliao 島（現在の和平島）に上陸してそこを占領した。更に陽明山の西側にある滬尾 Huwei をも占領し、基隆には聖薩爾瓦多 San Salvador 要塞、滬尾（現在の台北淡水）には聖多明哥 Santo Domingo 要塞を設けた。聖多明哥要塞は淡水紅毛城という名で観光遺跡になっている。

かれらは滬尾にカトリック教会を建てた。そこにはスペイン人神父のほかに、日本から逃れて来たカトリック信徒もすくなくからずいたそうだ。

台湾北部に基地を構えたスペイン人は、徐々に内陸に向かって支配の手を伸ばして行く。金山 Jinshan と萬里 Wanli 地区に支配の領域が広がり、また西方は淡水河をさかのぼって台北盆地の征服に向かった。スペイン人は台湾で硫黄と鹿皮を入手して輸出した。

そのころヨーロッパには、台湾の島の東側にある哆囉滿 Duo Laiman で豊富な金銀が採取されており、住民は黄金にまみれた暮らしをしているという噂が広まっていた。ジパング黄金郷の話はあちこちに飛び火していたようだ。マニラから調査隊が現在の花蓮立霧溪口 Hualien Liwu Xikou 地区に派遣されたが、原住民に皆殺しにされかかった。

台湾黄金郷譚は本国で根強かったものの、マニラの総督庁はあまり関心を示さず、黄金郷探査は継続しなかった。むしろ台湾南部で活発に動いているオランダ人の去就のほうが大問題であり、マニラも台湾の要塞も通商保全のための軍事戦略をはるかに重視していた。

だが本国の経済状況の悪化のために台湾に設けた基地への補給が続かず、現地の自給自足への努力を強いたものの管理運営の失敗と疫病の流行が基地の維持を不可能にした。

南にいたオランダ人は北にいるスペイン人が目の上のたんこぶになり、1642年に軍船隊を進発させて基隆に攻撃を加えたところ、士気の落ちていたスペイン人はあっさりと屈服し、基地をたたんでマニラに引き上げた。

スペイン人を追い払った後、オランダ人は台北盆地を中心に北部地域をも支配下に置き、ほぼ台湾島の全域を統治した。それからのおよそ十年間が台湾 VOC にとっての黄金時代になったようだ。しかし黄金期を過ぎればあとは没落が待っているというのが歴史の常道なのである。[ 続く ]

## 「台湾のジャワ煉瓦（3）」（2020年09月23日）

1624年、バタヴィアに拠点を置くVOCは台湾の南西海岸にある大員を占領して基地を設け、要塞を1627年に完成させた。1634年の完成と書いている記事もある。要塞はゼーランディア Fort Zeelandia と命名されたが台湾人は熱蘭遮 Jeranja と呼んだ。

大員は北京語でこそ Dayuan だが、閩南語では Taiuan あるいは Tuuan と発音される。オランダ人が文書に書いた Tayowan や Tayouan という言葉は現地語を聞き取ったものだろう。

この大員が台湾という地名の語源とも言われているものの、地元原住民である平埔 Pingpu 族の言う地名を福建人が閩南語で大員と表記したという話もあるので、大員という文字が台湾になったような表現は控えるべきかもしれない。

大員は現在の台南市安平区にあり、ゼーランディア要塞跡は熱蘭遮城遺跡を残す安平古堡という名の公園地区になっている。遺跡と言っても、VOCが最初に作った要塞は赤レンガの城壁だけが残されているにすぎない。

1662年に鄭成功がオランダ人の台湾支配を崩壊させ、オランダ人を追放して漢人の統治体制に変えた後も、ゼーランディア要塞は王城や台湾城と名を変えて使われ続け、さま

ざまに改築がなされたことから、ゼーランディア要塞が元の姿をとどめることはありえなかった。

要塞の最初のデザインは言うまでもなくヨーロッパ式のもので、内郭と外郭に分けられ、内郭は四辺形の三階建ての建物だった。最上階の四隅は堡壘になっていてそれぞれに5門の大砲が置かれていた。内郭には高官用の居宅、教会、兵舎、牢獄などが設けられた。現在その建物の最上階には赤いピラミッド型の屋根を持つ展望塔があるが、それは1891年に建てられたものであり、オランダ時代のものではない。

要塞の外にはパサルが作られた。このゼーランディア要塞からおよそ4キロ離れた内陸部にもVOCはプロヴィンシア Provintia またはプロヴィデンシア Providentia と名付けた出城を設け、その間に道路を建設した。それが台湾で最初に建設された道路だとされている。プロヴィンシア要塞は現在赤嵌樓 Chihkan Tower という名称で呼ばれている。

ゼーランディア要塞の城壁は高さが大人の背丈三人分、幅およそ1メートルで、20メートルほどの長さだけが残っていて、そこには今もVOCのアイコンを見ることができる。その城壁の赤レンガはジャワで作られたレンガであり、VOCは要塞建設のためにわざわざジャワからそれを台湾まで運んだ。そのレンガを積み重ねるとき、接着させるためにモチ米と砂糖そして貝殻の粉を砂に混ぜて使った。

原住民は初めて見た赤色の土で作られた構造物を見て驚き、その土を紅毛土と呼んだそうだ。紅毛というのは華人が赤い頭髪のヨーロッパ人に与えた呼称であり、紅毛人が持って来た土製のものというのがその意味だろう。プロヴィンシア要塞も同じ素材と同じ工法で作られており、現在残されている赤嵌樓は紅毛土の建物のイメージを保っている。

[ 続く ]

## 「台湾のジャワ煉瓦（４）」（２０２０年０９月２４日）

1970年代に空路ジャカルタのクマヨラン空港にはじめて到着した時、眼下に見える街並みの赤屋根（というより正確にはオレンジ色だろうか）の並びに目を奪われた体験がある。わたしにとってはそれがジャカルタの第一印象だった。粘土を型成形して焼成された瓦やレンガはそのままだと赤味がかかる。たいていの建物に使われている赤瓦がジャカルタの街の色のイメージ作りの一端を担っているその現象を面白いものだと感じた。

インドネシア語でレンガはbatu bataであり、赤レンガはbata merahと言う。インドネシアでは古代から恒久建造物にバタメラを使うことは普通に行われていた。現存しているチャンディの中でバタメラが使われているものは少なくない。

スマトラのチャンディバハル Candi Bahar、スリウィジャヤ時代のチャンディ群ムアラタクス Muara Takus、ジャワではカラワンのチャンディバトウジャヤ Candi Batujaya、マグランのチャンディレツノ Candi Retno、パティのチャンディカイエン Candi Kayen、プロボリンゴのチャンディジャブン Candi Jabung、トロウランにはチャンディティクス Candi Tikus、チャンディブラフ Candi Brahu、およびいくつかの大門などがある。他にも、オランダ時代以前の宮殿や要塞など巨大建造物にも使われている

し、ましてやオランダ時代に建てられた建造物、中でも要塞にはバタメラがふんだんに使われている。

あちこちに散在しているチャンディにバタメラが使われていることは、バタメラ製造工場があちこちにあったことをうかがわせるものだ。現在でも赤瓦や赤レンガの製造工場が各地に存在していることと無縁ではないだろう。

bata という言葉を聞くと、インドネシアで有名な靴メーカーを思い出す人がいるかもしれない。あるいはジャカルタのカリバタ Kalibata 英雄墓地を思い浮かべるだろうか。靴メーカーbata の工場が Kalibata 地区にあるという話になってくると、それらを関連付けずにはいられないひとも出現するだろう。

靴メーカーの bata はチェコ人アントニオ・バタが 1894 年にチェコで興した会社だ。インドネシアでの操業開始は 1839 年（1831 年説もある）で、カリバタ地区に工場を建てて生産を始めた。

現在のカリバタ地区を通っている川はチリウン川の一部なのだが、そこがカリバタと呼ばれるようになった由来の中に、バタの工場があったのでその名が付けられたというものもある。別の説では、その地区に古い時代からレンガ製造場があり、川にたくさんのバタが転がっていたためバタの川つまり Kalibata という名称が付けられていたというもの。後者の説に従うなら、バタ靴工場は同じ名称が地名になっている場所を選んで工場を建てたことになる。さて、どちらが卵でどちらがニワトリなのか？

後者の説のバタ製造場はバタメラでなく日干しのバタコ batako を作っていたようだ。昔からインドネシアでは、重い大量の貨物は船で運ぶのが常識で、チリウン川は貨物輸送のための水路として利用されてきた。舟がパクアンとスダクラパ、バタヴィアとバイテンゾルフ間を往来し、上流からは竹の輸送のために筏が組まれてチリウン川を下って来た。バタコが岸辺から舟に積み込まれるときに岸辺に転がり落ちたものがたくさんあったのかもしれない。[ 続く ]

## 「台湾のジャワ煉瓦（終）」（2020年09月25日）

オランダが大員に基地を設けて VOC の日本航路と中国航路の中継基地にしたとき、そこが台湾の国際世界に開かれた扉になった。VOC のアジア通商ネットワークの結節のひとつになったことで、VOC 扱い商品である中国産の絹・生糸や陶器あるいは日本

産鉱物資源の中継倉庫の役割もゼーランディア要塞が担うことになり、中国産の陶器や台湾産の砂糖がバタヴィアに、中国産の絹布・生糸や台湾産の砂糖や鹿皮が日本に運ばれて行った。

オランダ人は最初大員を占領してから、近隣の原住民諸種族を段々と服属させていった。大員の町には市制を敷いて漢人を含む原住民の統治を行い、服属させた周辺諸種族は年一回大員に集めて年間活動報告をそれぞれに行わせ、西洋式民生を目指す原住民統治を展開して行った。その中にはキリスト教の布教や学校教育など文明化のための活動が含まれており、学校へ学びに来る者には米や衣服が与えられた。原住民はまたアルファベット文字の使用も奨励された。

VOCは最終的に台湾島南半分の海岸地帯を幅広く統治下に置き、あたかもそこに植民地を形成したような姿を見せた。スペイン人を北部から追い払ったあとは、その地域をも掌握したので、台湾島沿岸部の大部分が台湾VOCの支配下に落ちたと言えそうだ。もちろん、内陸山岳部は違う。

会社事業としての領土経営は植民のないものになるのが必定であり、それを植民地と呼ぶべきかどうかの疑問が生じる。VOCの地域支配を植民地と呼ばないひとびとの根拠がそこにある。

オランダ人による統治が開始される以前から、台湾には漢人や日本人が住んでいた。オランダ人はかれら来住者に人頭税をかけ、さまざまな経済活動にも課税した。オランダ人はまた漢人に土地開拓と農作業を行うよう仕向け、それを成功させるために漢人への優遇策を執った。そのためにバタヴィア華人社会の指導者のひとり蘇鳴崗 Su Minggang を担ぎ出して台湾で采配を振らせることまでした。それが台湾で行われた土地開拓プロジェクトの事始めにあたる。そこで栽培させたのは米と茶そしてサトウキビで、砂糖は台湾からの有力な輸出産品となり、ペルシャや日本に運ばれて行った。

だが、台湾に渡って来る漢人の数はとどまる所を知らなかった。中国本土側の状況がそれに一役買っていたことは言うまでもあるまい。その波を抑えようとして、オランダ人は手のひらを反すかのごとく漢人に対する締め付けを開始する。土地購入禁止、地所から離れることを禁止、武器所有の禁止、集会の禁止、原住民女性と結婚した漢人のキリスト教入信強要、等々。

そうして1652年に郭懐一の率いる漢人の武装蜂起を招く結果となった。VOC軍と2千人の原住民部隊がこの漢人の反乱を鎮圧し、関わった男たちは皆殺しにされた。その数は一万人を超えたと言われている。それが漢人の胸に傷跡を残さないわけがない。

VOCは明に取って代わりつつある満州族の清に協調姿勢を示し、それまで保っていた明との関係を断ってしまう。漢人の反オランダ意識を高揚させる成り行きが、しつらえられたかのようにそこに備わっていた。台湾VOCの崩壊が近付きつつあった。

1661年に明を奉じて「抗清復明」の旗を掲げた漢人鄭成功の指揮する反オランダ戦争に漢人は続々と参集し、各地でオランダ人が攻撃され、1662年には最後の頼みの綱だったゼーランディア要塞も陥落した。VOCは台湾の足場を失って撤退してしまう。VOCの台湾支配はこうして1662年に幕を閉じたのである。[ 完 ]